

直原典子氏博士学位請求論文『S. T. コウルリッジの宗教思想—ユニテリアンからトリニテリアンへの軌跡』審査要旨

主査：早稲田大学教授 西山 清 博士（学術）早大

副査：早稲田大学教授 桑子 利男

早稲田大学教授 及川 和夫

成蹊大学教授 原 孝一郎

早稲田大学非常勤講師 小黒 和子

本論文は 19 世紀イギリス・ロマン派の詩人・宗教思想家として、イギリス文学界と宗教界、そして思想界に巨大な足跡を残したサミュエル・テイラー・コウルリッジ(1772-1834)の宗教思想の変遷を追い、その思想内容と意味を解明しようとする試みである。詩人としてのコウルリッジの作品と思想にかんする研究はすでに膨大な先行研究があるが、近年は新たに浩瀚な全集の改訂がおこなわれ、新しい方面からの研究成果も多々提出されるなど、海外の学界においてもコウルリッジ研究はロマン派研究の中核に据えられるようになってきている。しかし、コウルリッジの残した記述は分量の多さもさることながら、同一命題に時を置き微妙に異なる表現が用いられていることや、ひとつの問題が多角的、多義的な関係付けの下に思索されていることもあり、問題点を見出して適切な関係箇所を選択したうえで思索過程を辿らねばならず、その正確な跡づけは困難を極める作業である。さらに、これまでまったくコウルリッジの宗教思想に焦点を定めた本格的な研究は、晦渋なる思想と纏綿たる領域、また変貌・振幅する信仰ゆえに、イギリスをはじめとする欧米諸国でもそれほど例をみてもならず、わが国においてはほぼ未開拓の分野にとどまっているといつてよい。みずからもキリスト教の信仰をもち、信仰ゆえの苦悩をも知る直原氏は、神の観念にかかわる自身の真摯な信仰上の問題にも鑑みてこの困難な領域に真正面から果敢に取り組み、コウルリッジの青年期から壮年期にいたるまでの思想的成長と人間的苦悩の跡づけと意味の解明に、大いなる結実をもたらせた。その研究の手法は、宗教思想史と哲学の伝統を背景に据え、コウルリッジの講演、評論、書き込み、詩作品、また断片的な思索の記述にいたるまで数多の資料を丹念に読み込み、直原氏自身の信仰にかかわる問題意識とも照合しつつ丹念に論証を重ねるといった、きわめて手堅いものである。

本論の構成は以下のようになっている（細目省略）。

序論 18世紀末英国における宗教思想の潮流とコウルリッジの葛藤

第1章 1790年代におけるコウルリッジの宗教思想 ユニテリアニズムからネオプラトニズムへ

[1] ウィリアム・ペイリーの神学と S. T. コウルリッジ ハートリー神学（経験論的神学）、ペイリー神学（自然神学）の受容と超克

[2] カドワースの影響 経験論と重層化するネオプラトニズム

第2章 コウルリッジの初期の詩に見られる思想と実存的苦悩

（1）ユニテリアンの時代

（2）詩作に用いられる象徴

（3）失意の時代 原罪意識・実存的苦悩とトリニテリアニズムの光

第3章 思想的展開 汎神論、経験論、先験哲学をめぐる問題

（1）汎神論とキリスト教をめぐる問題 ワーズワスとスピノザとの対話

（2）経験論との対立 『政治家必携の書』に対するハズリットの批判

（3）ドイツ観念論の受容

第4章 極理論的弁証法 「三位一体論」を支える「極の原理」

（1）コウルリッジの「極理論」の意味するもの

（2）認識における「極理論」「方法の原理」における認識論

（3）「三位一体論」を支える「極の原理」

（4）コウルリッジによる「三位一体の原理」

結語 コウルリッジが投げかけた光

以下、第1章より第4章まで順を追って内容の紹介と講評をおこなう。

第1章 1790年代におけるコウルリッジの宗教思想 ユニテリアニズムからネオプラトニズムへ

本章は2部からなり、[1]は1790年代におけるコウルリッジの宗教思想を扱い、[2]は17世紀ケンブリッジ・プラトニストのひとりであるR・カドワースの影響を扱う。

コウルリッジは1805年を境に、キリストの神性を認めないユニテリアンからキリスト

を神として信仰するトリニテリアンへと信仰の立場を変えたが、直原氏はその変化の前提として、18世紀中葉ごろまでには合理的推論による神の存在証明の試みが衰退し、経験論的論証が勢いを増していったという歴史的事実の確認から論証を進める。コウルリッジ自身も、まずW・ペイリーに代表される18世紀の経験論神学に揺籃されたのだが、その後、1790年代後半にはプラトンやプロティノスに接近し、観念論の洗礼を受けることになり、これが彼の神学形成において大きな転換点になったと考えられる。さらに、彼の抱いていた神の観念は、おりからのフランス革命の動乱と流血という終末論的な状況とも重ね合わせられ、伝統的な護教論では説明不能となり、みずからが拠って立つ新しい神学上の観点を見出さなければならなくなったのである。この時期より以降は、直感的信仰と合理的推論、キリスト教とプラトニズム、啓示宗教と汎神論、また、実存的苦悩と合理的思考といったもののはらむ幾多の矛盾や対立を統合しようとする意識が、コウルリッジのいわば存在命題となっていく。

直原氏はまず [1] において、ポスト・ニュートニアン護教論（経験論神学）の流れを汲む18世紀の神学者ペイリーの唱える神学の内容と歴史的な位置づけを検証し、ペイリー神学のコウルリッジに与えた影響とやがて訪れる断絶と超克の経過を辿り、その後、観念論神学へと傾倒してゆくコウルリッジ神学の形成過程をつまびらかにする。いっぽう、[2] においては、おもに1795年プリストルでおこなわれた講演「啓示宗教について」が考察の対象となり、カドワースの神学を敷衍しつつ、コウルリッジが自身の神学的根拠を提示した意図を検証する。「講演」そのものにかんしては、論旨の二重性に着眼し、この時期にすでにコウルリッジの思考の内には経験論とネオプラトニズムが重層化されていた事実が指摘される。ここで重要なのは、直原氏がカドワースの『宇宙における真の知的体系』の一部を引用し、世界は目的を持って意図的に働く「形成的自然」でなければならない、「形成的自然」は神に従属する道具であるとするカドワースの神学思想の内実を捉え、その神学に見られる神的力の位階がネオプラトニズム的な三位一体の思想と通底することを指摘している点であろう。さらにまた、神が人間にとり理解不能であることは神の非在の証ではなく、人間の理解力の限界の証明であると説くカドワースの思想に、直原氏はのちのコウルリッジが強調する経験的「悟性」と直感的「理性」の弁別の萌芽を看取している。

第2章 コウルリッジの初期の詩に見られる思想と実存的苦悩

本章ではコウルリッジの代表的な詩作品が考察の対象となり、(1)の「ユニテリアンの

時代」においては初期の作品である 'Religious Musings' と 'Effusion XXXV' (後に 'The Eolian Harp' に改題) が扱われ、(2)の「詩作に用いられる象徴」においては 'Frost at Midnight' と 'The Rime of the Ancient Mariner' が、そして(3)の「失意の時代」においては 'Christabel' と 'Dejection: An Ode' がそれぞれ扱われる。

「宗教的瞑想」はユニテリアンとしてのコウルリッジの立場が鮮明な作品であり、D・ハートリーの必然論の影響を受けているが、同時に、おりからのフランス革命によりもたらされた悲惨な状況による黙示録的終末世界が重ねられている。注目すべきは、詩の後半においてプロティノス的世界創造のイメージが浮彫りにされ、経験論と観念論が黙示録的世界のイメージにより結合されている点にあるが、ここに直原氏はコウルリッジの重層的思考の顕在化を読み取る。これに対し、結婚を間近に控えたころに書かれた「流出 XXXV」では、愛の喜びと共に有機的世界との融和がハートリーの観念連合に倣うように、また、ネオプラトニックなイメージを用いて描かれていることが開示される。しかしながら、そのことは同時に、正統的なキリスト教信仰から逸脱しつつある自己に懐疑の念を突きつけざるをえないという、コウルリッジの複雑な心情告白でもあった。そして、これ以降、コウルリッジは自己の思想における矛盾と亀裂の統合を試み続けるのである。

叙上の試みを可能とするに際しては「シンボル」が重要な機能を担うことを直原氏は看取しており、それが次の(2)と(3)で扱われる作品群の分析を通じ明らかにされる。1810年代後半には、理解不能である無限、あるいは存在の全体性を「半透明に」映し出すものとしての「象徴」理論をコウルリッジは展開することになる。ここで直原氏は「深夜の霜」「老水夫の歌」などの作品に表れた象徴表現の分析を綿密におこない、有機的自然あるいは神との結合への希望、原罪意識と贖罪等の問題にコウルリッジがどのようにかかわっていたのかを解明していく。原罪意識に深く囚われていたコウルリッジにとっては、原罪意識そのものが自身の実存的苦悩となり、信仰の基底を構成していたことが明かされるのであるが、「老水夫の歌」の解釈で指摘された実存的不安と不条理の感覚は、この詩が現代においても十分に存在意義をもつことを教えるものである。これら二つの物語詩「老水夫の歌」「クリスタベル」の解釈で示された慧眼は、物語の面白みを存分に伝えるだけでなく、直原氏の詩作品に対する愛着と「読み」の深さとを読者に得心させるものといえる。

コウルリッジの詩的想像力の衰退は早く、すでに1800年を過ぎたころから兆候が窺われるのだが、「失意のオード」(1802)にはその自覚の苦悩と再生への苦闘とが表されている。そこに重ねられるのは、いまだトリニテリアンとしての自己意識の確立にはいたらず、

自然と神との亀裂、あるいは神と人間との亀裂を強く意識することになったことと、家庭の不和と従前の宗教的信条が希薄化されたという事実であろう。しかし何よりもまず、コウルリッジ自身の思索の深まりとともに、自然との一体化がすなわち神との一体化に他ならないとするハートリー哲学に、もはや信仰の基盤を置けなくなったというべきだろう。さらに言えば、それはコウルリッジがキリストの贖いによる救済を以前にも増して強く求め始めたということである。この後、彼は神と人間とを結合する哲学を求め、外界ではなくみずからの心の内に神の姿を感得すべく、深く自己に沈潜する方向を辿ることになるが、これらの詩の分析はその精神過程のありようを極めて明瞭に開示したものとなっている。やがてコウルリッジは、1805年にみずからトリニテリアンになったことをノートに書き記すことになる。

第3章 思想的展開 汎神論、経験論、先験哲学をめぐる問題

本章は(1)「汎神論とキリスト教をめぐる問題」(2)「経験論との対立」(3)「ドイツ観念論の受容」とから成るが、いずれの項目においても直原氏の苦闘のほどが偲ばれる章である。ここで扱われる問題は多岐にわたり、かつとりわけ硬質な議論を要求されるがゆえに、論述や引用文献の解釈に若干の疑義を呈せざるをえない曖昧な箇所も散見されたが、なおそれらを補って余りある卓見が随所に開陳されている。

コウルリッジの思索はつねにある種の直感が先立ち、その後、長い歳月をかけて哲学的論証をしていくという道筋を辿る。1805年以降、彼は直感的信仰と合理的推論、また経験論と観念論の統合を試み、さらに啓示宗教による汎神論の超克をめざす。

(1)は親友の詩人ワーズワスとスピノザがそれぞれコウルリッジに及ぼした多様な影響がコウルリッジにより受容され、超克されるまでの軌跡を丹念に辿ったものである。具体的には、まずワーズワスの作品『The Pedlar』と『Tintern Abbey』が採り上げられ、ワーズワスのいわゆる自然信仰とコウルリッジの信仰との比較検討がおこなわれる。ワーズワスは自然を神と同一視する汎神論の傾向があるとしばしば指摘されるが、直原氏はコウルリッジの信仰との微妙なズレを認めるものの、両者の信仰に本質的な差異はないと結論づける。しかし、ワーズワスが自然の中に、あるいは自然を通して神の存在を認めることに留まるのに対し、コウルリッジはさらに神と人間との関係を認識する哲学的確証を求め、宗教と哲学との統合を模索する方向に進む。この意図を成就すべく、彼はワーズワスに *The Recluse* の執筆を勧め、みずからは *Logosophia* の構想を打ち立てるが、作品はともに未

完に終わった。

後半では、スピノザとコウルリッジとの関係が扱われる。コウルリッジはスピノザをひとりの信仰者として、また、その哲学の論理的整合性を高く評価した。端的に言えば、コウルリッジは自然を通して神を感じずという詩人としての感性において、ワーズワスと共に感じ、神の絶対的存在をすべての存在の前提としたことにおいて、スピノザ哲学を擁護したのである。しかしながら、やがてコウルリッジはスピノザとも距離を置きはじめ、彼の神学をユニテリアニズムの汎神論と断ずるにおよび、訣別することになる。すなわち、スピノザ神学はいわば実存的救済者としての「人格神」あるいは「贖罪神」とは無縁の神学でしかないという認識に到ったのである。それはカント哲学を受容するとともに、彼が経験論神学と最終的に袂を分ち、観念論の次元に哲学的基盤を据える決断を下したことをも意味していた。

(2)は、当時花形の定期刊行物であった *Edinburgh Review* と *Examiner* 上で批評家 W・ハズリットが展開した、コウルリッジの著作 *The Statesman's Manual* の政治的、神学的見解に対する批判を分析したものである。しかし、政治的にはともかく、神学的には経験論を土台とするユニテリアンの立場から論評をおこなうハズリットと、観念論の立場をとるコウルリッジの陳述のあいだでは、本質的な議論がすれ違い、対立が残されたままとなるのはある意味で当然のことであったといえよう。コウルリッジのめざしていたのは、啓蒙思想家の懐疑主義やイギリス流の功利主義的神学をも、観念論の立場から超克することにほかならなかったのである。

(3)ではカント哲学、とりわけ『純粹理性批判』の受容とカント哲学との訣別が扱われる。人間の知覚を受動的なものとする経験論に対し、カント哲学でいう「統覚」(感性的直感による知覚対象のア・プリオリな統一の概念)は、知覚に主体の側の能動的機能が働くことを明確にしており、「統覚」は、統一された客体としての世界を形成すると同時に、認識主体の自己意識を生み出すというコウルリッジの哲学を支えることになる。コウルリッジの定義する時空間と感覚との関係や、悟性概念と認識、また統覚による自己意識の統一と対象との関係、さらに超越的(transcendent)と先験的(transcendental)との弁別などは、カントの先験哲学をほぼ忠実に辿ったものであることがわかる。しかしながら、カントの純粹理性が悟性とのかわりにおいてのみ有効であり、超越的思弁には無効としたのに対し、コウルリッジの考える「理性」は超越的観念を直接把握する力なのであった。この意味で、コウルリッジが16、17世紀の神学者 R・フッカーや J・スミスらから多くを

学んでいたことへの言及がなされていないという不満は残る。また、靈的世界の直接的認識というときの「認識」は、感覚的知覚とは異なる次元のものであり、むしろプロティノスの言う「観想」(テオーリア)に近いものである。この点にかんしても直原氏の表現には若干の混濁が見られる。しかしながら、靈的存在の認識にかかわる「理性」の捉え方においてコウルリッジがカントと決定的に異なることを検証した意義は大きい。靈的存在の実在性を認識する精神機能であるとする「理性」の哲学的根拠を、コウルリッジはやがてカント哲学とは別のところに求めることになる。

(3)の後半[2]と[3]においては、ケンブリッジ・プラトニストに対するコウルリッジの批判が扱われているが、直原氏はプロティノスの唱えた思想に遡及して論証を進める。プロティノスの唱える「一者」「知性」「魂」はキリスト教の三位一体と相似するかのようであるが、それらは「一者」を頂点として次第に弱小化する連鎖(万物の連鎖)の関係に置かれている。そこでは「一者」と個々の存在とのあいだに亀裂は生じないが、コウルリッジの三位一体はあくまで三者の位格が「一者」の「異なるあらわれ」と捉えるものであった。したがって、神と人間との断絶を強く意識し、神の愛による救済を希求するコウルリッジの意識は、ネオプラトニズムの流出や連鎖という存在の関係図式では飢餓感を満たすことはできず、トリニタリアンとしての思想を固めていくことになるのである。

第4章 極理論的弁証法 「三位一体論」を支える「極の原理」

本章は本論文全体の総括に相当するもので、これ以前の論証はすべて本章に収斂すると考えられる。また、本章は直原氏の創見に富む議論がもっとも力強く展開されている章であり、コウルリッジの宗教思想のもつ奥行きと深みに新たな探求の光を照射している。4部から構成されているが、大別すれば(a)理性による靈的存在の認識根拠としての「極理論」、(b)「極理論」にもとづく「三位一体論」となる。

「極理論」とは世界を有機的生命体として捉える生命論哲学ともいえる弁証法であり、自然界と靈的世界における力の顕在化には対立物を必要とするという考え方である。聖書自体に「極理論」にかかわる記述はなく、コウルリッジ自身も「神の三位一体」を「神秘」と記述してもいたように、心中には伝統的なキリスト教の思考を促す意識があったことは明瞭であるが、その一方で、論理的な確証を求める思考方法の背後には隆盛しつつあった18世紀の自然科学理論に対する知見があり、これは第3章で扱った三位一体論を支えるコウルリッジの理論的根拠となるのである。むしろ「極理論」を明快に定義すること自体、

困難な力業といわねばならず、コウルリッジはこの理論をさまざまな具体的事象に適用しつつ敷衍しているが、直原氏もこれを入念に辿って検証を進めている。

「極理論」に従えば、すべての力是对立の統合ないしは中立として存在し、内に対立をはらむ統合物として存在する。言い換えれば、すべて存在の実体は命題と反命題の統合されたものである。これを人間の認識の問題にあてはめて言えば、人間には無限に伸びる直線両端の認識は不可能だが、中点の認識を通じ直線の存在を察知するのである。この理論でいう認識とは全体の認識ではなく、ある一点に働く二極の作用を認識することにほかならない。すなわち、経験的次元における客体の認識は、客体を生成する霊的次元の力の存在を認識することにつながる。人間の認識は存在の全体性の把握には到らぬものの、その実在性の認識にはなりうる。人間は現象界とのかかわりにおいて霊的世界を直視し、また霊的世界とのかかわりにおいて現象界の真義を知りうるのである。そして、それら両極の源であり両者を包含する始原的な存在こそ、コウルリッジにとっての神であったのである。ここでコウルリッジは経験的認識の役割を悟性に、霊的存在の実在性の認識を理性に担わせる。霊的次元の存在の実在性にかかわる難解な神学論における文章表現には、正鵠を射ているとはいいい難い箇所も散見されるが、この問題は次の「三位一体論」において整序されることになる。

「極理論」によるコウルリッジの認識論は、二極の作用そのものを生み出す存在の考察に帰着する。叙上の議論で示されたように、この二極の作用とはあるひとつの根源的存在（＝神）の二様のあらわれであり、コウルリッジにとりこの根源的存在の直視を可能とするものは、人間の霊的力である意思にほかならない。そこにあるのは、人間の意志は神の意思の働きかけに呼応するとするコウルリッジの確信であると、直原氏を見る。神の意思を志向する人間の意志は、コウルリッジの実存的確信であり、それはまた罪深き人間の救済への希求なのである。そして、この「極理論」を土台にして、直原氏は「三位一体論」へと論を進める。人間の精神機能についてのコウルリッジの理論をより明確にするために、ここで直原氏はコウルリッジの言う理性、悟性、想像力、良心にかかわる理論を再度整理し、「極理論」を通してトリニタリアンとしての信仰に到達しようとしたコウルリッジの思考の軌跡を辿る。

デカルトの“*cogito, ergo sum*”は自我の知的作用あるいは人間の存在理由の説明となるが、しかもなおそれは人間存在の原因そのものを示してはいない。いっぽう、旧約聖書で神はみずからを“*I AM THAT I AM*”すなわち「在って在る者」あるいは「みずから

を存在せしめる者」と名乗るが、その名は神が自己を含めた一切の存在原因であることを示すと解釈されよう。これを直原氏は以下のように捉える：「神は万物の存在の源であり、創造の原理であり、絶対的・超越的な存在である。神は神自身の他に原因をもたず、自己措定的なものである。また神は万物を包含する存在であるとともに、万物を創造し、絶え間なく形成しつづける存在である。したがって、神は一切の存在そのものであると同時に、一切の存在の原因である。神は一切の客体であると同時に主体である。神において、主体と客体の間に亀裂はない。」しかし、そうであるならば、主体と客体の分離した人間が、主体と客体の統一された神を認識することは可能なのだろうか。コウルリッジは「三位一体論」を通してこの困難な命題に回答を与えようとするのである。

人間には神を直接認識することはできず、ただ時間軸と空間軸の中で感覚と悟性によって経験的に事物、事象を認識するのみである。しかし、読者はコウルリッジが汎神論を棄て、観念論から「極理論」へと進む過程で、人間は存在する事物、事象を「通して」それらを存在せしめる主体の存在を認識することをみてきた。しかもその認識には自然界と霊界との二極の力が働いていることをも。すなわち、人間は神から客体として与えられた事物、事象の認識を通して、主体としての神の認識にいたるのである。「三位一体論」に即して言えば、人間は「父なる神」の顕現としての「子であるロゴス」(キリスト)の認識を通して「父なる神」の認識へといたるのである。「極理論」に即して言えば、物質界と精神界の両極は人間で結ばれ、人間と神の両極は神の「ロゴス」で結ばれるということになるのであろう。だが、この点にかんしては、第2章で扱われた「シンボル」の概念を敷衍する形での論証方法がさらに有効であったのではなかろうかと思われる。また、キリスト教の三位一体を聖書の記述から切り離し、哲学中心に各々が思索するのであれば、三位一体という宗教的神秘に対する賛美と祈りは消失し、人間は現象の世界に埋没してしまうことになるのではないかと、との疑念が生ずることもある意味で否めない。しかし、信仰者の神秘に対する賛美や祈りは、究極的には学問領域というより、むしろ論者の「信仰」の問題であり、これ以上踏み込むことのできない際限のかぎりなく近くまで直原氏の学問的論証は及んでいると見るべきではないか。

ともあれ、この章の最後で、直原氏は神と人間をつなぐものとしての「神のロゴス」と「人間の言語」との関連を綿密に考察するのだが、そこからは信仰者としての直原氏の肉声もたしかに聞こえてくる。コウルリッジは「言語」を内在的な「語り」と顕在化した「音声」に弁別したが、これを直原氏は、神のロゴスと人間の言語に類比関係を認めた聖アウ

グスティヌスの『三位一体論』中の「内的言語」と「外的言語」の弁別に呼応していると思われたのである。卓見と思われる。むろんコウルリッジはアウグスティヌスの論に沿いながらも、より論理的な厳密さをもって関連性を考察している。神の意思が「ロゴス」として顕現するように、人間の精神がその言語として表出されるところに、人間を神のアナロジーとみなす根拠を求めるところである。この検証に留まらず、直原氏はさらに進んで、人知に届きうる「言葉」として神がみずからを啓示したことこそが、とりもなおさず神の人間に対する愛を示すものにほかならないと結論づけるのである。

叙上のように、コウルリッジの思索のかかわる領域は実に多岐、壮大なものであるが、直原氏はコウルリッジに直接、間接にかかわる膨大な文献に加え、宗教、歴史、哲学等の文献をも丹念に読み込んでおり、その多大な努力と困難極まりない論証を積み上げてゆく精力は驚嘆に値する。論証の過程で挙げられた原典からの引用はおおむね適切かつ十分なものであり、その解釈もいくつかの細部の誤訳を除いてはほぼ正確になされているといえる。あたかも鶉のように多読し、多義的に思索し続けたコウルリッジであるがゆえに、直原氏が訳語ひとつの決定にも多大な時間をかけ、思想を腑分けしていったことも十分得心させられる。シェリングなどドイツ・ロマン派哲学とのさらなる比較検証、あるいはシュレーゲルなどドイツ文人や 17 世紀イギリス散文とのかわりなどをカントとの訣別の記述につづけておれば、論証の明解さはさらに増したのではないかと憾みは残る。しかしながら、これらは全て他日の研究への期待であり、本論文の真価を損ねるものではない。

この審査結果を踏まえて、本審査委員会は、直原典子氏の論文が博士（学術）の学位を受けるに相応しい内容と品格を備えたものであると、全員一致で合意したことを報告するものである。最後に、直原氏は本年（2005年）8月、ワーズワスやコウルリッジなどロマン派詩人ゆかりの地イギリス Grasmere で開催された International Wordsworth Summer Conference において、本論第4章最後で扱われた「神のロゴス」と「人間の言語」との関連をさらに深く掘り下げた研究を 'Coleridge's "Speech and Sound" Compared with St. Augustine's Comments on Language' の題目で発表し、主催者側から本年の研究発表中の白眉であるとの評価を受けたことを付言しておく。

2005年11月1日